

牧水の恋と旅 加古陽

一九二八（昭和三）年に四十三歳で逝つて九十年。若山牧水の節目の年ということで、関連のイベントや出版が続く。そんな中、独自の視点で牧水を描いた二冊の評伝が出版された。俵万智『牧水の恋』と、正津勉『ザ・ワンダラー 濡草鞋者 牧水』。歌人と詩人それぞれの個性が発揮され、どちらも面白い。

一本の補助線を書くことで、視界が開けることがある。俵の補助線は「恋」だ。〈恋は、いつ始まるのだろうか〉。印象的な書き出しに始まり、関連書や雑誌、手紙など一つずつ原典に当たりながら青年牧水が情熱を傾けた園田小枝子との恋をたどる。

牧水研究の重要な基礎資料は、弟子・大悟法利雄の『若山牧水新研究』だ。そこで大悟法は、小枝子が初めて上京して牧水の下宿を訪ねた時期を「明治四十年の春」と推定する。これに俵は「（もつと）早かったのでは」と疑問を呈する。兵庫で小枝子と出会って帰京するのが明治三十九年九月。友人に「若い時代、青春時代！」と浮かれた手紙を出したのが同十二月。この間に東京で二人が再会したと、俵はみる。この手紙以外にも傍証がある。翌四十年一月、同じ友人への手紙に〈見もしらで昨日おぼえし寂しさと相みしのちのこの寂しさと〉と書いていることだ。これは、

会つてなきや詠めないでしよう、というわけだ。事実を検証しながら、二人の恋の経過を確定させてゆく展開はスリリングだ。

俵はその後も歌や手紙をもとに丹念に心情をたどり、代表歌の〈けふもまたころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつあくがれて行く〉を「思い人の面影を追つて、自分自身を励ましつつ行くと、恋する心がさまよい出るといふ歌である」と喝破する。

牧水は一時、恋愛の勝者となるが、やがて恋破れ、アルコール漬けの日々に拍車がかかる。俵の筆は「恋」を補助線に「その後」を追ひ、最後にこう書く。〈恋は、いつ終わるのだろうか〉

一方、正津の補助線は「旅」だ。大悟法本などによりながら、群馬・みなかみへの旅など、牧水の旅をたどる。早稲田大学を出てから人生の五分の一を旅の空で過ごし、生涯に詠んだ約九千首の三分の一は旅の歌だったという牧水。その人生を宮崎・坪谷の故郷で過ごした幼年時代からこつこつと追ひ、旅人（まさに長男につけた名前だ!）としての牧水像を浮かび上がらせる。

「濡草鞋者」とは、日向の言葉で「村にやつて来たよそ者」を意味するようだ。ゴールドラッシュの米西海岸よろしく、石炭が出るということで日向に集まってきた「濡草鞋者」たち。彼らと同じ「あくがれ」に突き動かされるように、牧水は旅し、歌つた。博学な詩人は、ジョルジュ・バタイユ（思想家）や河東碧梧桐（俳人）らとの共通点や影響を語りつつ、縦横に牧水像を紡ぐ。

「あとがきがわりに」は、牧水の詩「空想と願望」。〈日本国中にある／樹のすがたと、／その名を、／知りたい。〉〈おもふ時に、／おもふものが、／飲みたい。〉。素直な願いが、泣かせる